

# 大麦「ニシノホシ」の大豆後作における施肥法

金森伸彦・山戸陸也<sup>1)</sup>

(熊本農研センター球磨農業研究所・<sup>1)</sup> 芦北地域振興局)

## 【目的】

大麦「ニシノホシ」を転作大豆後作圃場で栽培した場合、水稲後作栽培とは生育経過が大きく異なり、収量品質が不安定になることが知られている。そこで、大豆後においても水稲後並みの収量品質を確保するための施肥法を検討する。

## 【材料及び方法】

平成13年から15年にかけて、大豆後の水田に11月下旬に「ニシノホシ」を播種し、施肥試験を行った。各試験区のN施肥量(kg/a、いずれも基肥+穂肥)は下記のとおり。なお、穂肥は2月下旬に施用し、平成13年は①②⑤のみ実施した。

- ①: 0.5 + 0.2    ②: 0.3 + 0.2    ③: 0.0 + 0.2
- ④: 0.0 + 0.0    対照区: 0.5 + 0.2 (水稲後)

## 【結果及び考察】

「ニシノホシ」の転作大豆後作栽培では、施肥量が多いほど倒伏程度が大きく、収量は不安定となり外観品質が低下する傾向が見られた(図1~3)。

また、施肥量が多いほど千粒焼酎加工適性に影響する蛋白質含有率の上昇も見られた(図4)。

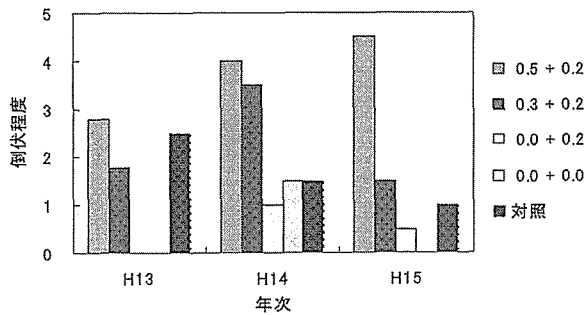


図1 施肥量と倒伏程度

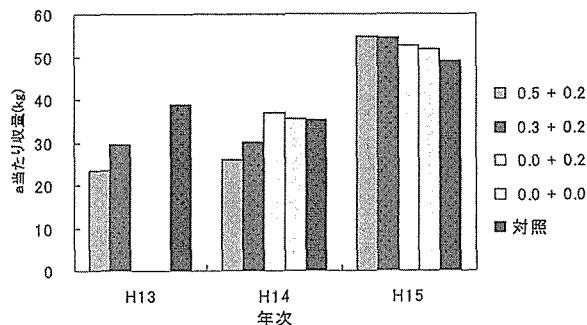


図2 施肥量と収量

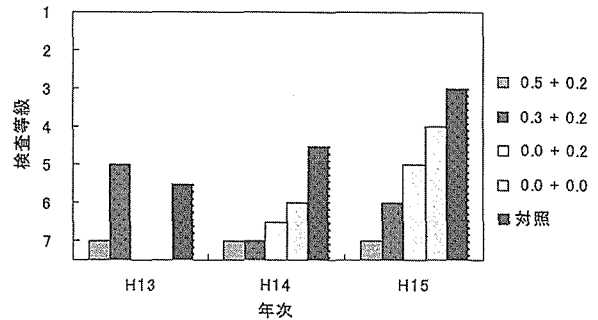


図3 施肥量と検査等級

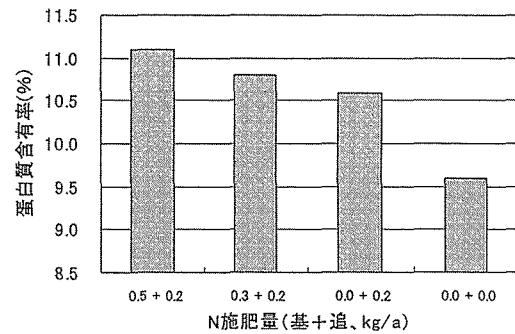


図4 施肥量と蛋白質含有率(H15)

そのため、大豆後作栽培で「ニシノホシ」の収量・品質を安定的に確保するには無肥料栽培が適すると考えられる。

なお、大豆後作圃場(無肥料)の土壤中窒素濃度は、大豆地上部残さの有無に関わらず2月下旬までは低いレベルで推移したが、その後急激に上昇し、3月下旬に水稲後作圃場における穂肥施用直後とほぼ同じレベルに達した後、5月上旬には水稲後作並に低下した。(図5)。

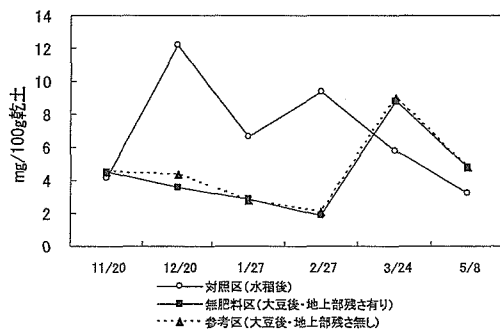


図5 土壤中の硝酸態窒素含量の推移(H15)